

気になる言葉③ グローカリゼーション

佐々木 隆

「気になる言葉」としてこれまで「① グローバリゼーション」「② 情報」「③（二〇〇七年一月）を取り上げて来た。いずれも現代を讀み解く言葉である。最近「グローバリゼーション」に似た言葉に「グローカリゼーション（glocalization）」というのが妙に気になるこの頃だ。発音では「グローカリゼーション」という場合もあるが、この言葉は「グローバリゼーション」と「ローカリゼーション」の複合語ということになるのであろうか。

今日のグローバリゼーションによって、地球上の文化の均質化が進んでいる。だが、それに反発し、地域や国家の特色を出そうとする動きも盛ん

になっている。グローバリゼーションとローカリゼーション（localization、地域化）というふたつの相反する動きが、セットになって現れている。

それを一語に縮めて、グローカリゼーション（glocalization）ともいう。（鈴木貞美『日本の文化ナシヨナリズム』平凡社、二〇〇五年十二月、十五頁）

書名に「グローカリゼーション」が使用されているものもようやく登場するようになった。その中の定義も見ておこう。

「文化接合」というアプローチ、さらに、一歩進んで「グローカリゼーション」および「翻訳的読み換え的適応」というアプローチで、小規模社会から大規模社会までを扱っている。なお、「グ

ローカリゼーション」という用語は、ロバートソン (1992) も指摘しているように、*Oxford Dictionary of New World* にも載っており、もとは日本のマーケティング業界で使われていた語である。たしかに一九九〇年代「Think globally, act locally」という広告のコピーがあったが、そうした意味で使われていたようだ。ロバートソンは、「二十世紀末の『現実の世界』が、現代生活のマクロの側面という意味でのグローバルなものを、ミクロの側面という意味でのローカルなものに連結させようとしていることに留意しなければならぬ。」(ロバートソン 199:172-4) としているが、本書のタイトルにもそうした意味が含まれている。(前川啓治『グローバル化の人類学』新曜社、二〇〇四年一月、十頁)

引用中にあるロバートソンの『グローバリゼーション』には「グローバリゼーション」と「ローカリゼーション」の次のような端的な定義があるので、紹介しておきたい。

グローバリゼーションの概念は、世界の縮小と、一つの全体としての世界という意識の増大の双方に言及する。(ロバートソン／阿部美哉訳『グローバリゼーション』東京大学出版会、二〇〇一年八月、十九頁)

ローカリゼーションの概念は、私の使い方では、もろもろの考え方や産品が、一つの全体としての世界及び諸地方に、同時に、市場化される傾向の増大を指している。かなりの期間にわたって、

「グローバルに考えよう、ローカルに行動しよう」という標語が使われてきている。私の主張

は、ますます多くの人々が、グローバルにかつローカルに、考えかつ行動するようになっていく、ということである。(ロバートソン／阿部美哉訳『グローバルゼーション』東京大学出版会、二〇〇一年八月、十六頁)

「グローカリゼーション」はもともと「反グローバルゼーション」を支える「ローカル」な文化、文化の多様性を追求することである。言ってみれば均質性を求める「グローバルゼーション」と地域化(個別化)を求める「グローカリゼーション」という相反する考え方を同時に行おうとする考え方と言ってもいいかもしれない。ハンチントンの『文明の衝突』(一九九六年)とは明らかに違った考え方ということになる。

日本は古い神話の時代から相反するものとの共生を容認してきた考え方を持っている。神話に注目

しておけば、『古事記』では、日の神である天照大御神(アマテラスオオミカミ)、月の神である月讀命(ツクヨミノミコト)、嵐の神である須佐之男命(スサノオノミコト)の三本柱の神が、三貴神と言われているが、月讀命については、不思議なことに逸話が出て来ない。また、『古事記』に最初に神を名乗る天之御中主神(アメノミナカヌシ)、高御産巢日神(タカミムスヒ)、神産巢日神(カミムスヒ)という三柱の神についても同様である。真ん中にいる神の存在が薄いのである。こうした構造を河合隼雄は「中空均衡型」と呼んでいるが、同氏によれば、他の民族の神話をみると、善と悪の戦いで必ず善が勝つ、あるいは、善と悪の対立の中、善が勝ち、悪を抹殺するという流れになっていると言う。しかし、日本の場合には、天照大御神の子孫が日本の国を治めることになったが、対立していた須佐之男命の子孫も残ることになる。元来、日本人の精神構造には、

神話の中空構造から対立を許容するシステムを持つていたということになる。こうした背景の中で、物事を相対的な視点からとらえようという考え方は一種、禪の考え方に似ているようにも思える。

さて、ローカリゼーションの名付け親は誰であるかははっきりしないが、どうも日本の企業らしいということがあちらこちらの文献で示されている。しかし、その考え方を広めたのはイギリスの社会学者、ローランド・ロバートソンであるようだ。現代を読み解く用語「グローカリゼーション」を追求していくと、なぜか日本に辿りついたことは皮肉なことかもしれない。

「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」、均質化と地域化にしろ、重要なのはバランスということになりはしないだろうか。西洋社会お得意のどちらが正しいかといった考え方ではなく、どう考えていくかということこそ突破口があるよ

うに思える。

かつて、マケドニア・アレクサンダー大王の政策やバクス・ロマーナの時代を見ても、まさに「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」、均質化と地域化のバランスであったように思える。もちろん、グローバルな物の見方が異なっていたはいたが。時代も変わり、政治体制も変わっても、シェイクスピアの歴史劇風に言えば、秩序の回復こそが時代を救うことになるのだろうか。